

命の大切さを学ぶ教室
全国作文コンクール

第6回

【優秀作品集】

発刊にあたって

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）が受ける被害は、犯罪行為そのものによって生じる心身の被害のみでなく、周囲の人々による心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難、社会からの孤立感など、その影響は広範囲かつ長期間にわたります。犯罪被害者等が再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等を直接対象とした支援のみならず、地域社会や学校・職場、さらには将来の社会を支える子どもたちに、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深めていただき、社会全体に犯罪被害者等思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から全国警察では、これからの社会を担う中学生・高校生を対象に、犯罪被害者等による講演や犯罪被害者等の手記の朗読等により、犯罪被害者等が受けた様々な痛み、子どもを亡くした親の思い、命の大切さ、被害者も加害者も出さない社会を望む犯罪被害者等の思いを伝える「命の大切さを学ぶ教室」の開催や、大学生を対象とした被害者支援に関する社会活動への参加を促進するなど、「社会全体で被害者を支え、被害者も加害者も出さない街づくり」に向けた取組を、犯罪被害者等の御協力を得ながら、教育委員会、民間被害者支援団体等と連携して積極的に進めています。

中でも、「命の大切さを学ぶ教室」は、犯罪被害者等への理解・共感を生む効果が大きいものであるのみならず、規範意識の醸成にもつながります。「命の大切さを学ぶ教室全国作文コンクール」は、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させるための取組として、警察庁が平成二十三年度から開催しているものであり、昨年度からは新たに文部科学大臣賞が設けられ、「命の大切さを学ぶ教室」に参加する中学校・高校が増え、この取組の更なる広がりが期待されるところです。

本冊子は、平成二十八年年度の第六回コンクールにおいて、全国から応募された作品の中から選考した

国務大臣・国家公安委員会委員長賞……………二点

文部科学大臣賞……………二点

警察庁長官賞……………六點

の優秀作品をとりまとめたものです。

警察としては、被害者支援に携わる方々との緊密な連携の下、今後も「社会全体で被害者を支え、被害者も加害者も出さない街づくり」の実現に向けて、「命の大切さを学ぶ教室」を始めとする諸対策に取り組んでまいります。本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等とはもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

平成二十九年二月十一日

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当） 西川 直哉

目次

☆中学生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

- ・ルールの向こう側にあるもの

港区立三田中学校

二年

稲垣

瑠奈

.....

1

【文部科学大臣賞】

- ・大切な人の明日の為にできること

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校

三年

根本

桃果

.....

2

【警察庁長官賞】

- ・命の大切さを学んで

私立本郷中学校

一年

井上

雄斗

.....

3

- ・被害に立ち向かう命

姫路市立網干中学校

二年

西口

春花

.....

4

- ・憎しみを生む武器

出雲市立多伎中学校

二年

伊藤

洸

.....

5

【中学生の部】

ルールの向こう側にあるもの

(東京都)

港区立三田中学校 二年

稲垣 瑠奈

私の親戚が先月、交通事故に遭いました。スピードを出して車を運転していたらしく、急に出てきた人をよけ、壁にぶつかりました。夜、かかってきた電話で、私は病院に駆け付けました。彼は、幸い意識はあり、話すことはできたのですが、着ていた服には血が付き、耳からは多量の出血、そして、首は動かさなくなっていました。彼の母親は、心配のあまり動揺しながらも、「他人を傷つけなくて良かった」と何度も言っていました。私はそれを聞いて、息子のケガに心痛めることはもちろんですが、それ以上に、他人を傷つけたり、命を奪うことは、大変なことなのだと気付きました。

今日、「命の大切さを学ぶ教室」という授業を受けて、親戚の事故のことを鮮明に思い出し、改めて交通事故の被害者と被害者遺族、更に加害者と加害者の家族のことを考えました。

お話して下さった岩崎さんは、飲酒運転のひき逃げ事故で息子さんを亡くされています。岩崎さんの言葉からは、被害者遺族のやり場の無い悲しみが伝わってきました。五年という年月を経ても、涙を流しながら

語られたお姿から、その悲しみが、決していやされることのないものなのだとすることが分かります。

元紀君のご飯を毎日用意し、誕生日のプレゼントを欠かさず、そして納骨することもできないという日々が、これからも続くということに胸がしめつけられるような悲しみを感じ、同時に、こういう事故をなんとしても無くさなければならぬと強く思いました。

そのために、私には何ができるのでしょうか。まずは、自分が加害者にならないために、交通ルールを守ることはもちろん、ルールの向こう側には、必ず誰かの命があるのだということを心に留めていきたいと思えます。私の乗っている自転車も、ルールを守らなければ人の命を傷つける道具になってしまいます。

次に、今日学んだ被害者遺族の苦しみを、一人でも多くの人に伝えることで、交通事故が計り知れない、大きな悲しみを生み出すものだという意識を社会全体で持てるようにしなければならぬと考えます。

社会全体が悲しみを共にすることができれば、飲酒運転が後を絶たない現実も変わっていくのではないのでしょうか。命の大切さを実感するということは、失われた命に対する苦しみや悲しみを知らることから始まるのだということを学びました。

大切な人の明日の為にできること

(栃木県)

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校三年

根本 桃果

「命の大切さを学ぶ教室」を受講した後、私はしばらくの間呆然としてしまった。それ程までに講師の方のお話は生々しく、私の想像を遥かに超えるものだった。胸が痛くて、苦しかった。しかし、どれだけ私が悲しく思っても、被害に遭われた方々の深い悲しみには及ばず、また、その大きさを推し量ることはできない。

会場に用意された何枚ものパネル。被害者遺族の方々が作って下さったものだ。その中の一枚に、近所の中学校の男子生徒のものがあつた。パネルに載せられた新聞記事を読むと、青信号だった横断歩道を渡っていた彼は、曲がってきた車にひかれて、即死だった。講師の方が話して下さった。かけつけた生徒のお母さんは、事故現場に飛び散った息子さんの体の破片を、ただただ拾い集めたのだと。

どんな気持ちだったのだろう。そのお母さんは、その時のことを一生忘れないだろう。最愛の息子を失った悲しみと犯人への怒り、憎しみにどれだけ心を痛めたことだろう。まさに生き地獄である。

もしも、私の家族や親しい人に同じことが起こったら…。考えるだけ

で、絶望的な気持ちになる。目の前の現実から逃げて、自らの命をも絶つてしまうかもしれない。しかし、講師の方は違った。ご自分の大切な娘さんを交通事故で亡くされた経験を、私達にありのまま話して下さいました。自分と同じ思いをする人を減らす為に、活動をして下さっている。その篤い心と姿勢に私は涙した。

犯罪被害者の方の生の声を聞いた私は、被害者の方は深い悲しみ、辛さを胸に抱えながら生きていることを知った。そして、人に深い悲しみ、辛さを与えてよい人などいない。飲酒運転や信号無視などは、加害者の危険行為の認識不足によって生まれる。

私は、運転免許を持っている両親に話してみた。すると、免許取得の際や更新時に悲惨な事故の映像を観て、運転時への注意喚起を促されていると言う。一人一人が命の重さを知り、思いやりを持ってハンドルを握ろうと、改めて意識するようになるようだ。

一度失った命は、還ってこない。だから、自分を含む誰の命であつても奪つてはいけなと思う。私達が生きている今日は、もっと生きたかつた誰かの明日かもしれないから。

起きてしまつてからではもう遅い。命が尽きてしまつてからでは、どうすることもできない。だから我々は、そういつた事件・事故を未然に防ぐ為に、もっと人を思いやる気持ちが必要。そして、自身のエゴや欲に負けない強い気持ちを持つこと、想像力を働かせることが必要である。

突然奪われた命の為に…。

自分や自分の大切な人の明日の為に…。

命の大切さを学んで

(東京都)

私立本郷中学校 一年

井上 雄斗
いのうえ ゆうと

もしも突然、自分や家族や友人がこんな危険な事故にあつたら、僕は
どう思いどんな行動をとるだろう。身近に体験したことのない僕にとつ
て、交通事故の悲惨さと被害者遺族の声を聞いて、命の大切さについて
考えた。

ニュースや新聞でも事件や事故を目にしているいつも心が痛くなるが、我
が子を奪われた遺族の声を直接聞く体験は今までなかった。交通犯罪の
悲惨さには、計り知れないほどの悲しみがあると思った。

青信号を横断中に大型車に踏み潰されてしまった事故の発生は、どう
理解すればいいのか。青信号を渡っていて事故に遭うのでは、ルールの
意味もない。殺そうと思つて起こしたものではないだろう。でも我が子
を失った親の気持ちは、どんな言葉にもできない悲しみだと思う。家に
帰りすぐに、命の大切さの講話について話した。母からの言葉は、「そ
んなことが身近な人に起きれば、一生悲しみからぬけだせないわ・学校
に被害者の遺族の方が話しに来て下さったなんて。」と言葉をつまらせ
た。

僕は毎日のように事件や事故をニュースで目に見ているが、僕も含め

て大半の人がそんなニュースを他人事のように聞き流してはいないだろ
うか。聞いて心を痛めても、すぐに忘れてはいないだろうか。自分は事
件や事故に遭わないと思いきんでいることに気づいた。命の大切さの講
話を聞いているうちに、自分の命は決して自分だけのものではない、今
まで僕を支えてくれたすべての人と共有しているものだと気づかさ
れた。毎日普通に生活している自分の幸せを当たり前だと思つてはいけ
ない。僕を支えてくれる人に感謝しながら生きなければいけないと
思つた。

命の大切さを学ぶ講話は、僕にとって今までの、どんなテレビ番組や
新聞や小説よりも心に深く響き、真剣に受け止めることができた。青信
号での事故を二度と起こさない方法がないか考えたりした。歩行者信号
が青の時は、車はエンジンが動かないシステムなどは作れないのかと考
えたりもした。そして何よりも悪質なドライバーが放置され、交通事故
では被害者がとても理不尽な立場に置かれていることを痛感した。

命の大切さを学んでから、命の重さを改めて深く考えた。命は自分が
どうにでも使える大切で重いものなのだと思つた。今年四月、本郷中学
校の入学式で、理事長先生が本郷生としての約束をおっしゃった言葉の
一つが、「自分がされて嫌なことは、人にしてはいけない、人の気持ち
を思いやる心を持つ。」でした。人の気持ちを思いやる心を持ち続けて、
この心が世界中に続いていけば、命を大切にすると世界が広がり、社会全
体が良い方向に進むのではないか。命の大切さの講話で学んだことを、
良き未来へつなげたい。

被害に立ち向かう命

(兵庫県)

姫路市立網干中学校 二年

西口 春花

命の大切さは、誰かの命を奪い、誰かの命が奪われることで知るものではありません。

私は講演して下さる前までは、犯罪被害者は遠い存在でよく分かっています。しかし、講演して下さった市原千代子さんの被害者であることを忘れさせる姿、自分の人生を誰かの為に堂々と生きるその志に心が動き、犯罪と被害を身近に感じました。

市原圭司さんの事件と同様の、未成年が未成年による暴行で被害されるケースは私も最近よくニュースで目にします。その事件の原因としてネットトラブルが挙げられます。それが私にとって一番身近な問題です。私の周りにもスマホを使用している友達多くいて学校以外での不透明なやりとりがあるようです。私はネットでのやりとりで友達とのつきあいが軽く荒くなっていると考えます。また、見知らぬ人との出会いで悪質な世界へ巻き込まれたりして事件につながると思います。インターネットは便利でもその人の手の温もりを相手に伝えることは出来ません。だからすれ違いが起き、人づきあいを軽くみて、人の命を軽くみ

るようになってしまふのだと考えます。本当に大切にすべきものは相手の命であり、気持ちです。私の手の温もりを相手に伝える為には、私の命と気持ちに温もりがなくてはなりません。その温もりを私に与えてくれるのは家族や友達という存在。そして生活の場である家や地域、学校だと、忘れないでいきたいです。

私は圭司さんの写真を見て、改めて事件の生々しさを痛感しました。そして、息子を失った市原さんが、講演会の活動をされるようになるまで、どれほどの時間が流れたのだろうか、加害者である三人は今どこで何をしているのだろうか・・・という感情が出てきました。加害者には被害者と同じ苦しみを味わってもらいたいという怒りもあるのではないかと私は思います。しかし市原さんの口からはそのような言葉はありませんでした。

もし私が被害者として生きることになったら、気を持ち直して誰かの為に自分の被害を話す事は出来ません。けれど、これ以上誰かが苦しまないように強い意志で被害に立ち向かっている市原さんの姿からもらった温かさを誰かに与えられる人になりたく思いました。

今回の講演を通して命の大切さを学びました。それは一人一人等しい重さです。私も防げる被害から目をそらさず命を大切にしたいと思えます。自分の温かい手が人を傷つけられる残酷さも持っている事、私達の年齢で被害者にも加害者にもなり得る事を理解した上でその手が冷たくなるまで精一杯生きていきたいです。そして一人一人が自分の温かな手を温かな手で握ってくれる大切な家族や友達がいること。全ての方のその命を大切に出来る人でいられたらと思います。

憎しみを生む武器

(島根県)

出雲市立多伎中学校二年 伊藤 洸

「悪口は絶対に言っではいけません。」

これは、小学校一年生から常に先生に言われてきた言葉だ。小学生のときは、皆がそんなことは当たり前だと思っていたし、嫌なことを言われたとしても、真に受けず気にならなかっただろう。そのうえ、僕は恥ずかしい程完璧主義だったため、悪いと思ったことには手当たり次第に注意していた。

しかし、中学二年生になってから数ヶ月経ったある日、担任の先生が僕たちのクラスをきつく叱った。その内容は、発言にデリケートさが無さ過ぎるというものだった。つまり、このクラスでは、クラスメート同士が何でも彼でも話し合えるということだ。男女間や友だちとの仲が良すぎるから、公で話すことではない悪口でも口に出してしまう。

そしてついに、友だちにつられて、自分もじわじわと悪口に参加するようになった。悪口は言っではいけないという意識は変わっていないはずなのに、無意識的に悪口の話題に参加しているし、参加したがっている気がする。逆に、ここで注意すれば、いわゆるKY（空気が読めてい

ない人）になるだろうと思ってしまう。皮肉にも、悪口を話すときは、友だちと話題を共有できるから盛り上がる。

次第に悪口が増えた学校生活を始めていた矢先、悪口に対する考え方が変わるきっかけとなる出来事が起こった。それは、学校で行われた、「命の大切さを学ぶ教室」という講演会だった。講師は、息子を十代という若さで亡くされた母親の方だった。その息子さんはなんと、学校の先輩らの集団暴行に遭って亡くなられたのだった。電話になかなか出なかったという理由で。僕はそれを聴いて不思議でたまらなかった。

「なぜ命を奪うまで相手を痛めつけないといけないのだろうか。なぜそんな仕様も無い理由でいじめることが出来るのだろうか。なぜ誰も暴行を止めなかったのだろうか。」

怒りが込み上げてきた。そのすぐ後、とても重大なことに気付いた。僕がしていることも、その加害者と同じだということに。

僕は、一部の人に悪口を言われていた時期があったことを思い出した。とても嫌だった。二、三人のグループの中の一人が僕の方に指をさしてこつちを見ていた。悪口を話しているとすぐに分かり、目を逸らした。人差し指が矢に変わって心に突き刺さったようだった。それ以降は、和解するまでその人と話せなかった。

僕は今、指をさしている側にいることに、この上ない情けなさを感じた。そして、悪口という人を傷つけるだけの汚い武器を捨て、勇気を持って注意することがいかに大切かを学ぶことができた。

これからは、悪口のない生活を取り戻し、学んだことをずっと忘れないようにしたい。

【高校生の部】

兄が教えてくれたこと

(山口県)

山口県立下松高等学校 二年

番田 彩音

私が命のはかなさを知ったのは中学三年生の冬でした。私はあの日のことを今でも鮮明に覚えています。

雪が舞う寒い冬の夜の夜明け前、私の兄は十九歳という若さで亡くなりました。社会人一年目だった兄は、夜勤の帰り道にトラックとの衝突事故で帰らぬ人となりました。私は、両親と一緒に間違いであることを祈りながら、兄を迎えに警察署へ向かいました。

しかし、そんな私たちの願いは叶いませんでした。

警察署で兄に会ったとき、頭が真っ白になり何も言葉が出ませんでした。突然のことで、頭では分かっているはずなのに受け止められない自分がいました。ただ心の中で「これは夢だ。何かの間違いだ。」と繰り返していたことを覚えています。

命がそんなに簡単に消えてしまうとは思ってもいませんでした。当たり前の存在が当たり前でなくなる。それがどんなにつらいことか身に染みて感じました。今でも「ただいま。」と元気に帰ってきてくれるような気がします。そしてそれを打ち消さなければならぬ寂しさをその度

に感じます。

私は兄の声がいせせません。ずっと一緒に過ごしてきたのに、家族なのに声がいせせないのは、兄ときちんと向き合っていなかった証拠だと思い、悩んでいました。でも、少し前に観た映画のおかげで私の考えは変わりました。私が兄の声を思い出そうとすることは、兄の事を思い出すことにもつながります。だから、これは兄からのメッセージだと思えるようになりました。「忘れないで。」という。

昨年学校でTAV交通死被害者の会の方の講演があった時、私は迷いました。兄のことを思い出して辛くなりそうで、聴くのが怖いという気持ちがありました。それでも、同じ状況にある人が、どのような気持ちで日々を過ごしているのか知りたいという気持ちもあり、思い切って聴くことにしました。

思い出すだけで辛く、泣きたくなるような経験を、「息子の死を無駄にしたいくない。」という気持ちから、たくさんの方の前でお話されている姿を見てとても強い方だと思いました。また、後悔をずっと背負って過ごしてきたと聴いて共感でき、私も兄との思い出を力に変えて前に進もうと思いました。

それまで私は「交通事故」という言葉を避けていました。しかし、いつまでも逃げていてはいけません。私の将来の夢は救急救命士です。幼い頃からずっと医療系の仕事に就きたいと思っていましたが、兄が亡くなった後、更にその気持ちが強くなりました。誰よりも先に現場に行き、たくさんの方の命をつなぐ救急救命士の仕事を通して、私は命に真剣に向き合いたいと考えています。

救急救命士は、色々な現場へ駆けつけなければなりません。また、助ける事ができないことも少なくないと聞きました。辛いことの多い仕事ですが、命を救う仕事を通して、私は兄の死から逃げることなく、きちんと受け止めて成長していけるような気がします。私は全身全霊をかけて仕事に取り組む、そんな救急救命士になりたいです。

兄は、私に命について考えるきっかけをくれました。命は、私たちが考えている以上にはかなく、簡単に消えてしまうものです。だからこそ、今この一瞬を後悔しないように大切に生きていきたいと思えます。与えられた命を精一杯生きること。それが私たちの努めです。

兄は、どんなに辛いことがあっても決して弱音をはかず、いつも笑顔でした。私も、そんな兄のように前を向いて歩いていきます。たくさんの大切な命を救うために……。

もし、もう一度だけ兄に会えるなら「ありがとう。お兄さんの妹で本当に良かった。」と心から伝えたいです。

一つの命の大切さ

(秋田県)

秋田県立西仙北高等学校 三年 加藤 明日香

私は「命の大切さ学習教室」で遺族にとつて被害者の命がどれだけ大切であったかが分かりました。二十歳という若さで突然命を落とし、元気な姿で家族の前に戻ってくる事ができなかった娘さんの話を聞きましました。二度と会えないという現実を受け入れる事ができなかったと思います。しかし、現実には現実でした。どんなに辛く、苦しかったことか想像すると私は、とても怖くなってしまいました。

私が小学校六年生の時、同じクラスの子が病気で亡くなってしまいました。校長先生から亡くなったと知らせを受けた時、「なぜもつと話をしなかったのだろう。」「なぜ病気に気づいてあげられなかったのだろう。」「と、とても後悔しました。後悔してもその子は二度と教室に戻ってくることはありませんでした。

命は全て同じです。交通事故だから、殺人事件だから、仕方がないと言われるのは違うと思います。一度失ってしまおうと戻りません。加害者は禁固三年という短い期間で世の中に戻ることができ、新しい道を進んでいくことができます。しかし、被害者は戻れません。そして遺族は、

子供の将来を奪われ、成長を見届けることができません。命をお金と同じ扱われることが一番悔しいと三浦さんは語っていました。亡くなった人は死亡届を出され、名前や存在を消され、生きていたことすら世の中から消されるのです。今、この日、この時間を生きていたはずなのです。日本では毎日誰かが交通事故の被害に遭って、死者0の日が無いと聞き、とても悲しいです。たった一つの命が奪われている。普段の生活での油断が人生を左右してしまうかもしれない。奪われた人は命を戻して欲しいということしか望まない。どんなに高額なお金を払われてもその人は戻ってこない。命をお金に変えられることは被害者遺族をもつと苦しめることになると思いました。

また、犯罪被害者の交流を通し、同じ想いを抱えている人たちが支えあい生きているということも知りました。それはとても良いことだと思います。この交流で心が救われた方がたくさんいると思います。人と人が助け合い生きていくことはとても重要な事でこれからも続いていってほしいと思います。

三浦さんの話を聞いて、心がけたい、このように生きたいと思つたことがあります。まず、「これぐらい大丈夫だと思わないこと。」普段の生活でもありがちな「これぐらい」というのをやめる努力をしたいと思います。次に、「信頼できる相手を探すこと。」学校でいつも一緒にいる友達に何でも話せるようになり、何でも話を聞いてあげられるようにしたいです。三つ目は、「身の周りで起きた事故・事件を忘れないこと。」人の命は一度失くなると戻りませんが、人から忘れられる時にもう一度死を迎えるのだそうです。忘れずに、教訓としたいと思います。

今、自分が感じられる楽しいこと、辛いこと、苦しいこと、悲しいこととはすべて生きているから体験できています。それを忘れずに、一日一日を大切にし、交通ルールを守り、責任ある行動を取らねばなりません。また、私たち高校生は卒業後、車を運転する人が多いと思います。調子に乗ってスピードを出したり、信号無視をしたりして事故を起こすことは、絶対にしたくありません。油断をせず、安全運転を心がけます。

当たり前の日々が当たり前だと思わず、自分の命は自分で守り、普段の生活を見直し、親が命をかけて産んでくれた、たった一つの自分の命を大切に生きたいと思いました。

平等な命

(東京都)

東京都立南多摩中等教育学校 四年

山崎やまざきののか

私は「命の大切さを学ぶ教室」を受講して、命とは何かを改めて考えました。命は親から授けられ、ずっと大切に守って生きてもらっている本当に尊いものだと思います。そんな私の命は私自身が一番大切にしていかなければならないと思っています。

「命の大切さを学ぶ教室」で先生が、自分が考える命はどんな命かを考えてみようとおっしゃいました。私はずっと決められずにいましたが、最近になってようやく決めることができました。私の考える命は、「平等な命」です。これに到り着くきっかけとなったのが、先日相模原で起きた事件でした。

この事件の容疑者は「障害者なんていなくなればいい」、「障害者は幸に見えないから抹消することが救う方法だ」などと供述したそうです。しかしこれは容疑者の偏見に過ぎません。障害のある方にも感情はもちろんあるし、不幸せだと決めつけることはできません。さらに抹殺すれば救えるという考えも、独りよがりな考えでしかありません。命は平等に与えられたものなので、平等に生きる権利もあるはずで、それなの

に自分勝手な決めつけで人の命を奪ったこの事件は本当に許せないものだと思います。そして私はこの事件を機に、命は平等だということをも自分の中で再確認しました。

最近では殺人のニュースも多いですがそれと同じくらい自殺のニュースも目にします。自殺は自分から命を絶つ行為です。しかしその原因は大半が人間関係だと思っています。いじめは相手に嫌な思いをさせてやろうと思ってやっていただけで、死んで欲しいと思っていたわけではなかったということも多いそうです。しかしそんなことを言っても、相手が受けた傷は変わりません。殺人のように直接的ではないけれど、人の命を奪うことに変わりはありません。誰もが平等に持っている生きる権利を侵害することになります。いじめが原因で自殺してしまうのはとても悲しいことです。遺族の心の傷はもちろんずっと消えないと思うし、いじめていた側も罪悪感を持って一生生きていかなければならなくてそれは本当に辛いものだと思います。いじめをしても誰に対しても何もメリットはありません。一人一人性格や考え方や価値観などが違うことを心に留めて、相手を思いやることでいじめはなくなると思います。言いたいことを全て我慢するわけではなく、伝え方を考えるのが大切だと思います。また、世界には貧困で生きたくても生きられない人もたくさんいます。しかしその人達も平等な命を持っているので、私は救うべきだと思います。救うのは簡単なことではないけれど、募金に参加することは私にもできます。小さな力でも集まれば大きな力になってたくさんの命を救うことができると思っています。平等な命を守るために協力すべきだと思います。

私自身も一つの平等な命を持って生きています。命は平等に与えられるけれど、誰の命にも終わりはありません。だから私は授けられた尊い命を充実したものにするため、一瞬一瞬を大切にして生きていこうと思います。また、当たり前なことではあるけれど、他人の命も大切にしていきたいです。そのために、周りを見て相手を思いやる行動を心がけようと思います。近年増えている凶悪犯罪者も、生まれた時は他の誰とも変わらない純粋な赤ちゃんであるはずです。周りの人が命の大切さを伝えられるか、なのだと思います。だから私が親になった時には、子供に命の大切さを教えるために愛情を注いで育てたいです。命を大切に、これからも生きていきたいです。

「命の大切さを学ぶ教室」の講演を聞いて

(富山県)

富山県立呉羽高等学校 一年

佐伯 亜朱紗

「もう、夫が亡くなる前のように笑えるようになることは、ないと思います。」

なんとという悲しい言葉でしょうか。これは講演をして下さった方の言葉ですが、今でも私はこの言葉が耳によみがえってきます。

初めて、お話をされる前のIさん（講師）を見たとき、事故などとは無縁の、私たちとなんら変わらない方のような印象でした。お話を聞いて初めて、私はこの方の置かれた現実には驚き、話をされるつらさが身にしみるような気がしました。私たちが想像もつかないほどのつらい思いをされているながら、それを私たちに感じ取らせないまでするには、どれほどの苦しみを飲み込み、乗り越えてこられたのでしょうか。自分の身に置き換えて想像すると、今でも私自身の心がつらくなってきました。Iさんが言われた「以前のように笑えることは、ない」という言葉の意味は、表情で「笑顔」になることができて、心の底から笑顔になることはできないということだと分かりました。

また、Iさんは「加害者二人はまったく反省しておらず、それどころ

か罪のなすりあいをしていたんです。」と憤るように言われました。加害者二人がまったく反省をしていなかったということに、私は衝撃を受けました。日頃から、私たちは学校でも家庭でも、悪いことをしたときはしっかりと反省し、次に生かすことで成長できるのだと教えられてきました。それなのに、人の命を奪うという重大な過失を認めず、責任転嫁をしようとした加害者のことを本当に腹立たしく思います。このような人がいるから、被害者家族の方の苦しみは倍以上になるのだと思います。

けれども、もしその苦しみの中に差し込む光があるとすれば、それは周りにいる家族や、友人の支えだと思えます。不安な気持ちや悩み事を根本から解決することはできなくても、話を聞いてあげるだけ、そばに寄り添うだけ、気にかけるだけ、こうしたほんの小さな一つだけの心遣いが、救いになると思うのです。

私の父はたびたび海外出張へ行くことがあります。日本とは違う環境や言語の中での仕事。帰ってきてもストレスや疲れが残ったままの状態で、再び行かなければならないこともあります。そんな父に、私は必ず「いつてらっしゃい」と声をかけます。時間があるときは携帯電話で連絡を取ることもあります。家に帰るまで「一人」でいるよりも、父は少しでも心に安らぎを感じることができていると思います。私自身も、父とのコミュニケーションを通して安心を得ることができそうです。

このように小さな事であっても、私たちは互いに心遣いをする必要があります。小さな事が集まればそれは大きな力になり、支えとなると思えます。だからこそ私は、日頃から人を思いやる心を持ち、相手の受け

取り方や感じ方を考えて言葉を選び、人がつらい気持ちになつていきに優しい言葉をかけたり、暖かく接したりするよう心がけたいと思います。そして、どんなことがあつたとしても、加害者二人のような、人の気持ちを踏みにじるような心を持たないようにしようと思います。

私たちが、お互いに心遣いをし、支え合うためには、他人の気持ちを分かつとうとする思いが大切であり、想像する力が重要だと思います。そして世の中の人が、みなこうしたい思いや想像力を持つことができたなら、事故や事件の被害者はきっと減つていくのではないのでしょうか。Iさんのお話を聞いた後、私は何度も心の中で願ひをつぶやきました。

「届け。届け。私の願ひ。世の中の誰もが、この方のようなつらい経験をしなくても済むように。人々が互いに相手の痛みを想像し、優しい心がつながりあう世の中になるように。」

Iさんは、講演のたびに思い出したいくないことを思い出し、つらい気持ちでお話をされるのだと思います。それでも私たちに話して下さいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。Iさんの思いを無駄にしないよう、私自身、小さな心遣い、支え合いを大切にし、それを周囲の人たちに広げていけたら、と思います。

命について考える

(三重県)

三重県立津工業高等学校 二年

うちだ さくら
内田 桜

講演会を聞いて、私は改めて命の大切さに気づくことができました。

講演会は、十年前に十二歳の娘さんを信号無視の車による交通事故で亡くされた方のお話でした。

「交通事故により二名死亡」などのニュースを聞くことがあっても、家族を亡くされた方から直接お話を聞くことは初めてでした。

ニュースを聞いたり読んだりして、「もし自分の家族や近い人だったら…」と考えても、それは想像ができるような範囲ではありません。

講演会では、何枚もの写真を見せていただきましたが、娘さんの生前の笑っている写真からは想像もできないようなことが起きてしまいました。話を聞くうちに事故の場面が鮮明に目に浮かび、とても心が痛かったです。

私には、弟が二人います。八年程前、一番下の弟が交通事故にあったことがあります。私はまだ小学二年生から三年生にあがる頃で、弟はまだ幼稚園年中さんになる前でした。

一緒に行動していたはずなのに、道路を渡り終えた後、横にいないこ

とに気がつきました。振り返るとなぜか横たわっていて、「なんで寝てるの」と思い戻ってみると、血まみれになっていて、私には一体何が起こったのか理解できませんでした。

数分前まで普通に一緒に遊んでいたのに、弟は血まみれで目を覚ましません。小学生の私には意味もわからず、ただただ呆然と立ち尽くしてしまいました。

幸い弟は回復しましたが、小学生にも分かる「あの時手をつないで渡っていたら…」という後悔と罪悪感で、今思い出しても胸がはりさけそうです。

それがもし、「死」となると私にはどういうことか分かりません。

命は一人一人の人間にたった一つ、それきりで、簡単にすませられるものではありません。「重い軽い」以前の問題で、目の前にいる知らない「誰か」にも家族がいるし大切な人もいます。一つの命は大きすぎる存在で、つけられない程の価値があり、失ってしまえばそこで終わってしまう。

考え出せばきりがなくて、よく分からなくて、失ってから初めて気づく、人間にはとても重すぎる存在だと思います。

最近はいく「死ね」と簡単に言いますが、普通に考えてありえない言葉だと気づきました。

「死にたい」という人もいます。本当に思ってもいないことを冗談でも口にしてはいけません。

命の尊さや大切さをきちんと理解し、分かっている人は少ないと思います。私もまだ、よくは分かりません。

まず、「命は大切」と理解するよりも、考えることが大切だと思います。考えることさえせずに、「死ぬ」「死にたい」と口にする人が多いのだと思います。

交通事故のニュースを聞いて、一番悲しいのは、信号無視や飲酒運転による事故で無関係の被害者の方が亡くなるというものです。

全くの想定外の出来事だと思います。

数分前までご飯を食べたり音楽を聞いたり、友達と会話をして普通の日常を過ごしていただけなのに、一瞬でそれが奪われる。今までしてきたことや過ごしてきた日常、何年かの一人の人生が、知らない人の不注意で一瞬にして奪われる。とてもお金で解決できるような問題ではありません。

残された家族の方がどういう気持ちなのか理解の域をはるかに超えますが、考えるだけで心が痛みます。

講演を聞かせてもらって学んだことは、命について考えることとあたりまえの存在に感謝すること、交通事故について考えることです。

普段あたりまえに過していることがどんなに幸せか、私たちは分かっています。いつ何が起こるか分からない中で、「あたりまえ」が絶対ではありません。その存在に感謝し、「ありがとう」「ごめんなさい」をきちんと伝える必要があります。

交通事故は、防げることが沢山あると思います。「ながら」運転、飲酒運転、信号無視。最近では「歩きスマホ」も交通事故の原因の一つだと思います。無関係の人を巻き込んで、人生を狂わせるようなことがあつては、絶対にいけません。事故の原因になることを自らの手でつくつて

はいけないのです。何のための法令かも全ての人が考え直す必要があります。

命は一つの人間であり、感情を持ち、両親がいて価値のつけられるものではありません。

講演で話してくださった全てを何度も考え直して確認し、命あることに感謝しようと思います。

